

東山安井のバス停より高台寺に向けて再度出発、
下河原の通りに出ました。

この通りは北は八坂神社の正門である南樓門前にはじまり、南は八坂通まで至る南北の通りです。

高台寺付近の地名を「下河原」といい、その名は菊溪から流れる出る菊溪川と清水・音羽山からの轟川が合流したこの辺りが川原であったことに由来します。

かつては花街として賑わっていた下河原。

江戸時代初期、豊臣秀吉の正室である高台院がこの地に高台寺を建立。それに伴って連れてきた芸人が住み着いたのが、後の花街の始まりといわれています。

た下河原の芸妓は「山根子芸者（やまねこげいしゃ）」と呼ばれ、当時祇園などにいた「茶屋女」とは違い、遊女めいたところがなく、芸に優れていて人々を魅了したと伝えられています。

現在祇園甲部の京舞として知られている「井上流」を街の流儀としたのも「祇園新地」（後の祇園甲部・祇園東）よりも下河原が先だといわれています。



菊溪川へのルートは、京都一周トレイルの道標「東山28」から現地へ

菊溪川の位置図



祇園エリアから高台寺山国有林を東に望む。菊溪を含む山の風景は、ほとんどがシイ林に覆われ、林内は光が届きにくい環境となっている。

12月18日 都草わくわく倶楽部特別例会

「菊溪川を求めて」(2)

幕末、明治まで傾城町（公許花街）嶋原の管下として渡世（免許）が許され、栄え続けました。明治を迎え、日本最初の博覧会の附博覧として祇園の「都をどり」と共に「東山をどり」が上演されたが（ここに古くからあった「まくづ踊」という伊勢音頭に似た総踊を元としたものという）衰退の一途をたどり、1886年（明治19年）、祇園甲部に合併され、消滅した。現在、花街としての面影は殆ど残っていませんが、お茶屋の鑑札プレート掲げている民家が数軒存在していたりしており、周辺に旅館や料亭が多いのも花街だった名残だとわかりました。

さて途中から「石堀小路」に歩を進めました。ねねの道とその1本西の下河原通を東西につなぐ、石畳と石堀が美しいこの小路は明治末期から大正時代にかけて形成された京情緒漂う路地空間で、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。その絶好のロケーションから雑誌等によく取り上げられるものの、入口が見つげにくいのか人が少なく、情緒的な雰囲気味わえると評判の限界。独特の隠れ家的な雰囲気と「お妾さん小路」の異名を味わいながら、往年の映画スターや吉村公三郎監督などの映画制作関係がこよなく愛した光景を体感しました。



12月18日 都草わくわく倶楽部特別例会

「菊溪川を求めて」 (3)

高台寺道（ねねの道）から北に曲がり、高台寺門前からいよいよ目的の「菊溪川」探索です。

大雲院からま円山公園野外音楽堂を東へ料亭「菊乃井」さんのほうへ曲がるとまもなく「西行庵」の旧跡。

茅葺の西行庵が建つこの地は双林寺の飛地境内になります。西行は双林寺塔頭・蔡華園院に止宿し終焉を迎えたといふそんな事もあり西行草庵と呼ばれていたようです。又、芭蕉が西行を慕いしばしば滞在したと伝わります。現在の西行庵は比較的新しく、西行法師を忍び、明治26年（1893）に画家・富岡鉄斎が勧進文を書き、庵主小文法師が尽力して浄財を募り再建されています。

さらに坂道を進むと料亭「菊乃井」、入り口の石の置かれた園地を右折すると菊乃井さんの従業員駐車場に至ります。ここで「菊溪川」の細い流れとやっと出会いました。狭い公共通路を川沿いに進むと入場禁止の京都市のフェンス。ここから先は暗渠となっているようで往年の面影はなし。

残念ながら探索もここまで。西に眼下の祇園界隈を臨みながら、沈む夕暮れを前に、右を向くとなんと「道元禅師 荼毘塔」がありました！



道元禅師 茶毘塔 碑文

〔西〕

「西」 曹洞宗高祖道元禅師茶毘御遺跡之塔
永平七十一世遠孫比丘瓏仙教書(印)(印)

〔東〕

曹洞宗高祖道元禅師は内大臣久我通親の子、十三才の春叡山に
上り出家得度、天台の教学を修め、
更に内外の智識に道を訪ね遂に大宋国に渡って天童山の如浄禅
師より釈迦牟尼仏正伝の仏法を相続
して帰国せらる。後興聖寺、永平寺を開山日本曹洞の初祖也、
建長四年秋病を發し翌年京に帰り西洞
院高辻の俗弟子覚念の邸に病を療ぜらるゝも八月廿八日御歳五
十四才で遂に遷化せらる。直ちに」
合龍を天神裏の小庵に移し遺弟等東山赤築地の当処に於いて茶
毘に付す。爰に京都府下の法孫」
報恩の微意を表し謹んで建之」

京都府曹洞宗宗務所長

維時昭和四十年八月廿九日

鷹峰龍乘



12月18日 都草わくわく倶楽部特別例会 「菊溪川を求めて」 (5)

道元禪師が病氣療養のため上洛し、弟子覚念の西洞院高辻の邸宅に滞在中に没しました。弟子等がこの地東山赤築地で茶毘に付した伝えられ、この石標は道元が茶毘に付された地を示すものとして昭和40年（1965）建立されました。

目的の一つ、この地が名前の由来の菊溪菊（泡黄金菊）は見つかりませんでした。東山の「菊溪」の雰囲気を感じながら、今も菊溪川は東山に存在していることを全員、確認出来ました。
(野津 隆 記)

追記：

かつては菊溪川は東山から高台寺境内の北を西に流れ、円徳院などの塔頭群と町家貸地の境界を南北に流れ、轟川と合流して西へ進み、建仁寺境内を流れて鴨川に注いでいたようです。今はほとんどが暗渠となっているため、下河原をはじめ、この界限に川があったことは殆ど知られていません。



道元禪師 茶毘塔

12月18日 都草わくわく倶楽部特別例会 「菊溪川を求めて」

参考文献・資料

- ・ 千宗室・森谷尅久監修『京都の大路小路』、小学館、1994年、276頁
- ・ 田中緑紅 『亡くなった京の廓上』京を語る会発行、1958年
- ・ 明田鉄男 『日本花街史』雄山閣、1990年

菊溪川とは？



菊溪川と菊溪菊（キクタニギク）について



菊溪菊（キクタニギク）

【別名アワコガネギク、黄金色の小花が密集して開花】

主に本州の東北～関東の太平洋側と近畿地方の、日当たりのいい乾いた谷間や崖に自生するキク科の多年草。草丈は1～1.5mで、直立した茎の上部で多数分枝して頭状花序を形成し、晩秋、径1.5cmほどの小花を多く付ける。花は筒状花も舌状花も鮮やかな黄金色。密集した小花が泡立つように咲く様からアワコガネギク（泡黄金菊）とも呼ばれる。

キクタニギクの名前は京都市内の地名菊溪（菊谷とも）に因む。

ただ、京都府のレッドデータブック2015では絶滅危惧種に分類されており「和名のもとになった京都市東山区菊谷では絶滅」と記す。

そんな中、「京都伝統文化の森推進協議会」を中心に自生地復活に向けた活動が本格化している。市民やボランティアの支援も受けながら、昨年から今年にかけてシイなど高木の伐採、苗の植栽、散策道の整備などに取り組んできた。

キクタニギクにはアブラギク（油菊）の別称もある。これはかつて花を油に漬けたものが薬用の菊油として切り傷や火傷などに使われたことによる。ただ、よく似たキクで近畿以西に分布するシマカンギク（島寒菊）もアブラギクと呼ばれる。

キクタニギクは中国北部や朝鮮半島にも分布する。1990年代以降、全国各地で中国・韓国由来の種子が道路の法面緑化に広く使われた。

その結果、国内で本来の分布域でない地域に帰化しており、国立環境研究所の「進入生物データベース」はその影響として「在来種との競合、在来のキクタニギクの遺伝的攪乱」を挙げている。

菊溪菊（泡黄金菊）

菊溪菊（泡黄金菊）が、開花間近になってきました。この菊は、かつて東山区の高台寺の山の「菊溪」に自生していました。

高台寺付近の地名を「下河原」といい、その名は菊溪から流れる出る菊溪川と清水・音羽山からの轟川が合流したこの辺りが川原であったことに由来します。

菊溪菊は京都府レッドリスト(2018年版)では絶滅危惧種に指定されています。



京都伝統文化の森推進協議会の取り組み

京都伝統文化の森推進協議会（以下、協議会）では、平成28年11月7日（月）午後2時～午後4時まで、高台寺山国有林を流れる菊溪川沿いで、京都市と共催で「キクタニギクの咲く菊溪川の再生へ 現地調査」を開催しました。

円山公園内にあります京都市都市緑化協会事務所前に集合した後、協議会の高田研一専門委員の解説を聞きながら、高台寺山国有林内を流れる菊溪川沿いを歩き、キクタニギクの咲く菊溪川の再生に向けた調査を行いました。

現地ではキクタニギクの再生した光景をイメージすることができ、多くのご賛同を得ることができたと感じております。



菊溪川を探索

京の菊の名所は
嵯峨菊 大覚寺
貴船菊 貴船神社あたり

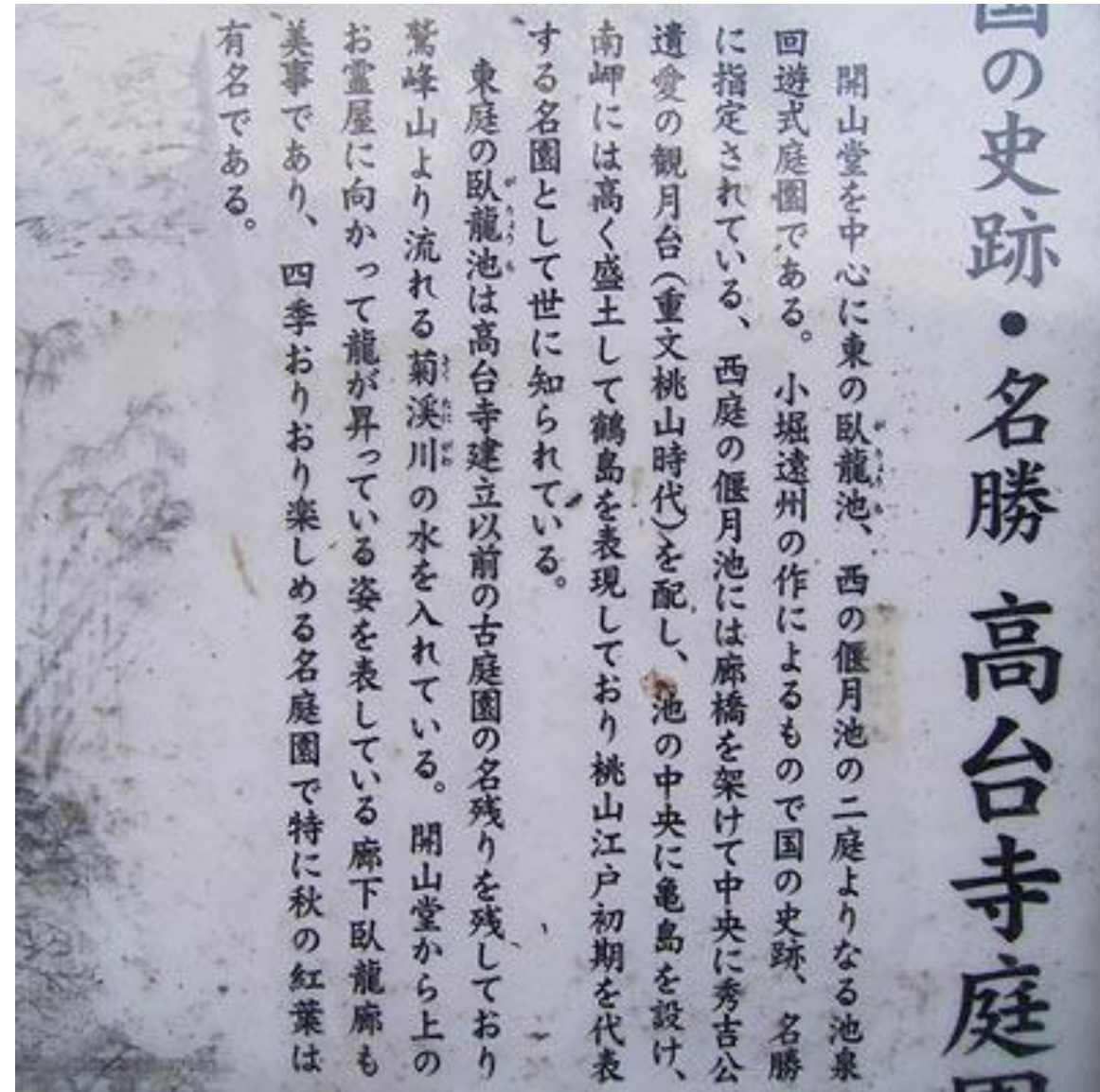
『京の名花名木』（竹林俊則著 淡交社）によると、菊溪(きくたに)菊という菊があって、東山高台寺の北の溪谷の菊溪に沢山咲き誇ったのでこの名前がついたそうです。

菊溪を水源として流れる川を菊溪川という。祇園下河原という名は菊溪川流域の河原であったことによるらしい。

高台寺の菊溪川の辺りに住んで菊溪焼をはじめたのは永楽12代和全。風雅な作品が沢山あります。

黄昏や萩に鼬(いたち)の高台寺 蕪村

下河原、高台寺は萩の名所で菊は忘れられたようだ。



菊溪菊 (キクタニギク) おおきに！！

